

イギリスにおける民衆信仰—キリスト教巡礼とその衰退

吉田正広

はじめに

本報告は、四国遍路とヨーロッパのキリスト教巡礼との比較を念頭において、イギリスにおける巡礼の成立・発展と宗教改革を契機としたその消滅について論じる。

まず最初に、「巡礼」と「巡礼者」に相当する英語の "pilgrimage" と "pilgrim" の語源について確認しておこう。それらの語源はラテン語であるが、そのラテン語に近い英語の動詞として "peregrinate" があり、「外に住む」、「外に行く」、「遍歴する」などの意味を持つ。また、名詞 "peregrine" は「外に出た者」「異邦人」を意味する。この語は、やがて、「信仰のため家や財産を捨て神を求めて旅立つ者」、さらに殉教者の墓に詣でるべく「外に行く」のは、世俗をなげうち出家するのと類似の行為とされるようになる。このようにヨーロッパの言語で「巡礼」とは、いくつかの札所を順番に回るという意味ではなく、むしろ世俗をなげうって、特定の聖地へと赴くことを指す言葉である。

1 ヨーロッパにおけるキリスト教巡礼

キリスト教巡礼には、三大巡礼がある。第一は聖地イェルサレム巡礼である。周知のように、イェルサレムは、イエス・キリストの刑死、復活、昇天の場であり、「聖墳墓教会」が建てられ、そこで「新しき火」の奇跡が行われた。中世の十字軍はこのイェルサレム巡礼の延長であったと言われている。第二は、ローマ巡礼である。ローマは、使徒ペテロ殉教の地であり、ペテロの墓の上にサン・ピエトロ大聖堂がある。当時は西ヨーロッパからのアルプス越えは困難を極め、ヨーロッパの人々にとって、ローマは贖宥のための巡礼地であった。第三の巡礼はコンポステラ巡礼である。スペインのガリシア地方のコンポステラは、聖ヤコブ（スペイン語で「サンティアゴ」）の遺体が9世紀に発見されたとされる地で、以来ヨーロッパ中から巡礼者を集めた。聖ヤコブは、使徒ヨハネの兄で、イエスの復活を目撃し、ヘロデ王（アグリッパ1世）に斬首された殉教者である。聖ヤコブはスペインで布教したとの伝説があり、830年ごろスペインのガリシアで首のない遺体が発見され、その地に教会が建設された。聖ヤコブはまた、イスラム教徒をイベリア半島から駆逐した「レコンキスタ」の過程で、イスラム教徒と戦うキリスト戦士の守護者となり、剣を持って白馬に跨る戦士像としても表された。12世紀頃にはクリュニー派修道院によって巡礼路が整備され、ヨーロッパ各地から巡礼者を集めた。病氣直しなど様々な奇蹟を求めて人々は巡礼に赴いたのである。ホタテ貝はサンチャゴの象徴であり、現在でも巡礼者のシンボルとして使われている。

2 イギリスにおけるカンタベリー巡礼の成立

イギリスにはキリスト教の三大巡礼に匹敵する巡礼として、カンタベリー巡礼があったが、その起源は他のキリスト教巡礼と趣を若干異にしていた。カンタベリーは元々イギリスのキリスト教発祥の地の一つであったが、巡礼がはじまるのはそれよりかなり後の時代になってからである。597年に修道士アウグスティヌス（オーガスティン）はローマ教皇グレゴリウス1世の命を受けてイングランドに正式にキリスト教を布教し、アングロ・サクソン七王国の一つケント王国の王の改宗に成功した。カンタベリーには司教座が置かれ、アウグスティヌスが初代カンタベリー司教に就任して、カンタベリーは正式にイングランドにおけるキリスト教発祥の地として位置づけられたのである。しかしながら、カンタベリー巡礼がはじまるのは、12世紀になってからであった。1170年に、カンタベリー大司教トマス・ベケットが、国王ヘンリー2世の派遣した騎士によってカンタベリー大聖堂内で殺害される事件が起きた。王権からの教会の自由を主張したトマス・ベケットは、ヘンリー2世と聖職裁判権などをめぐって対立していたのである。ベケットの遺骸は祭壇の前に置かれ、やがて地下の石棺に安置された。散乱した彼の脳漿や血は保存された。たちまちのうちに、ベケットの遺骸は奇跡を起こしはじめた。ローマ教会は、1173年にベケットを異例の早さで殉教者として聖別した。こうしてカンタベリーは、聖トマスの奇跡で巡礼者を集めたのである。このような状況のなかで国王ヘンリー2世は教会側に一定の譲歩を余儀なくされた。カンタベリーへの巡礼者は、「聖トマスの水」（カンタベリー・ウォーター）を土産として持ち帰った。それは、ベケットの血の染みた布を浸して瓶に入れた水で、病気の治癒、害虫駆除などに効能があるとされた。もちろんそれは、その他聖遺物の販売とともに、教会の収入となった。チャーサーの『カンタベリー物語』に描かれたように、カンタベリーには様々な階層の巡礼者が訪れ、活況を呈したのである。

3 中世末期における聖人崇拜の変容と教会批判

さて、中世末期になると、封建社会の危機とともに、カンタベリー巡礼にも微妙な変化が生じた。1381年には農民反乱であるワット＝タイラーの乱の中で、当時のカンタベリー大司教が殺害されるという事件が起きた。またこの時期には、教皇権の衰退と国民国家の成長が見られた。ヨーロッパ各国で国家的聖人が登場し、スペインではコンポステラ巡礼の目的であったサンティアゴが、カスティリャとアラゴンの「国民的聖人」へと変化し、グラナダ陥落後はスペイン王国の守護聖人となるに至った。フランスでは、パリの初代司教で殉教した聖ドゥニがフランスの王家カペー家のパトロン＝セントとなった。イングランドでは、15世紀の英仏百年戦争の過程で、殉教ローマ軍人で悪竜退治の伝説のある聖ジョージがイングランドの守護聖人になるに至った。リチャード1世（獅子心王）や1415年アザンクールの戦いで大勝したヘンリー5世がその立て役者であったと言われている。

ところでこの時期には、教会改革運動がジョン・ウィクリフによって進められた。ウィクリフは、教会に対する国家の優先を主張し、ローマ教皇の権威を否定し、聖書主義を唱えた。彼は、カトリック教会の正統教義である化体説——正餐式でパンと葡萄酒は実体においても形質においてもキリストの肉と血になるとする考え——を否定し、聖遺物崇拜を否認した。ウィクリフの考え方は、ボヘミアのフスに受け継がれたが、イングランドではローラーズの運動として展開した。彼らは、カトリックの教義・典礼を非難して聖人・聖遺物崇拜を罵倒した。カンタベリー巡礼の対象であった聖トマスは、国王に対する反逆者に過ぎず、カンタベリー巡礼は悪魔に魂を売り渡した輩の遍歴行であるとして非難された。聖水や聖体パンも否定された。このような聖遺物崇拜や巡礼に対する否定が、ローラーズの

特徴であった。

4 宗教改革とカンタベリー巡礼の終焉

ローズの運動は15世紀半ばに衰退するが、16世紀にはヘンリー8世によって宗教改革が行われた。イングランド宗教改革のきっかけは確かに国王ヘンリー8世の離婚という私的であると同時に政治的な事柄であったが、それだけにとどまらず、修道院解散や教義上の改革も行われた。イギリス議会（「宗教改革議会」と呼ばれた）は国王と協力して、1533年に「上訴禁止法」を、1534年に「国王至上法」を制定し、ローマ教皇からのイングランド教会の分離を成し遂げた。その後、王権と議会は、カトリック信仰の拠点であるとともに、イングランドに広大な領地を有する修道院の解体に乗り出した。1536年には「小修道院解散法」を、1539年には「大修道院解散法」を制定することによって、修道院を制度的に廃止した。それによって修道院の建物自体が破壊され、建築用の石材として持ち去られたという。また修道院にあった多数の聖遺物も徹底的に破壊されることになった。多数の聖像が「処刑」され、聖母の聖性が否定されたため、聖母像の「焚刑」さえ行われた。聖人崇拜は公式に禁止されたのである。カンタベリーの聖トマスの祝日は廃止され、彼の聖廟が解体され、聖トマスの聖遺体は「反逆者」として追放された。現在では、トマス・ベケットの廟がかつてあった場所を示す銘が残っているのみである。これ以後、基本的にはカンタベリー巡礼は行われなくなったのである。

おわりに——宗教改革以後の巡礼の内面化

以上に見てきたように、キリスト教巡礼は、カトリック信仰のなかで発展した。イギリスのカンタベリー巡礼は、ローマ教皇と王権との確執の中で、ローマ側の司教殺害を機に教会によって奇蹟が宣伝され、巡礼が集まることになった。教会に対する国家の優越を説いたウィクリフによって巡礼は非難され、やがて、宗教改革によってカンタベリー巡礼は否定されるに至る。こうしてイギリスでは宗教改革以後、基本的に巡礼は消滅する。しかしながら、英語で巡礼を意味するpilgrimという語は、宗教改革以後もとりわけピューリタンたちによって使用されつづけることになる。ピューリタン文学の傑作バニヤンの『天路歷程』（原題はPilgrim's Progress）の題名や、北米大陸に渡ったピューリタンたちの自らの呼び名（「巡礼者父祖」Pilgrim Fathers）に「巡礼者」ということばが使われたことは有名である。ピューリタンたちは、自らを「巡礼者」すなわち「異邦人」として位置づけたのである。宗教改革以降、「巡礼」が内面化され、自らの人生そのものを「巡礼」になぞらえたのではないだろうか。その場合の「巡礼」は、「信仰のため家や財産を捨て神を求めて旅立つ者」という先に述べた「巡礼」の本来の語義にもどったのではないだろうか。

<参考文献>

- 歴史学研究会編『巡礼と民衆信仰』青木書店、1999年。
青山吉信『聖遺物の世界——中世ヨーロッパの心象風景』山川出版社、1999年。
アルフォンス・デュブロン編著（田辺保訳）『サンティアゴ巡礼の世界』原書房、1992年。
浜林正夫『イギリス宗教史』大月書店、1987年。
中村勝己『イギリス歴史紀行』リプロポート、1991年。